The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「拝啓、ソクラテス者のみなさま」
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 2000, 7, p. 20-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7405
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「拝啓、ソクラテス者のみなさま」

寺田俊郎

夏の「第３回ソクラティク・ダイアローグ国際学会――ソクラティク・ダイアローグと倫理」から帰ってきてまもなく、「自由と正義は両立するか」という問いをめぐって３日間にわたる対話を共にしたドイツ人の青年が、メーリングリストをつくってくれた。さっそく投稿したオランダ人のベテランの進行役 facilitator の書き出しは、‘ Dear Socratics ’、「拝啓ソクラテス者のみなさま」。a Cristian を「キリスト者」と訳すのに倣ってとりあえずこう訳してみる。私も、ただ挨拶の作法に従うぐらいの軽い気持ちで、‘ Dear Socratics ’と書き出して投稿してから少し後悔した。‘ Ｄｅａｒ Socratics ’、ＳＤを実践する者の連帯感を感じさせるこの呼びかけを、本当は私はまだ使うことはできない。

ドイツ中部のロックム Loccum という古い（プロテスタントの！）修道院を中心として豊かな緑に赤い屋根の映える可愛らしい村で、私は不思議な経験をした。そこには、各国のソクラテス者達が集まっていた。ＳＤは、もともとレオナルト・ネルゾン Leonard Nelson というカリスマ的な哲学者のもとに集まったグスタフ・ヘックマン Gustav Heckmann をはじめとする弟子達が、ネルゾンの死後、継承し発展させてきたものである。ネルゾンは、ナチス政権掌握直前のドイツでＳＤという方法を通じて哲学するサークルを主宰するとともに、マルクス主義とは一線を画す社会主義を標榜して青年の政治結社を指導し、青年のみならず子どもも含めて教育する学校を運営していた。その一つが、今も名前を残す「哲学・政治アカデミー PPA」である。ネルゾンの学校は、やがてナチスの迫害を逃れて、まずデンマークに、ついでイギリスに移り、細々と生き延びた。長年ＳＤの先頭に立ってきたドイツの「ソクラティク哲学協会 GSP」のノーラ・ヴァルター Nora Walter も、イギリスの「批判哲学促進協会SFCP」のリーニ・サラン Rene Saran も、ネルゾンの学校の生き残りである。流浪の生活の様子は、ヴァルターの妹のリサ Lisa が詳しく話してくれた。これらネルゾンの精神を受け継ぐ弟子達のコミットメントのお陰で、今日のＳＤがある。

ネルゾンは弟子達に厳しい戒律を課していたらしい。その一つは菜食である。あらゆる動物の権利を尊重するという趣旨だそうだ。そのためかどうか、ソクラテス者達には菜食主義者が多い。だが、戒律の一つはまったく守られていない。飲酒である。ネルゾンは「理性的に考える」ために飲酒を禁じていたが、現代のソクラテス者達は、夜のセッションが終わると、ビールやワインを片手に、未明まで談笑に花を咲かせていた。私もこのシュンポジオン

に毎晩参加したが、夜半に私が退席する時も、シュンポジオンは終わる気配すらなかった。その思い出はアルコールの霧に包まれてはいるが、楽しかっただけでなく、昼間のセッションに劣らぬ勉強の機会だったといえる。

ＳＤについても、現代のソクラテス者達は、ネルゾンのやり方をそのまま受け継いでいるわけではない。現在のＳＤは、「新ソクラティク・ダイアローグ Neo-Socratic Dialogue」と呼ばれることもあるように、ネルゾンの古典的なＳＤとは趣を異にする。そして、新しいＳＤを実践する人々の間でも、例えばドイツのソクラテス者達と、オランダのソクラテス者達とでは、ＳＤに対する考え方も、そのやり方もかなり異なるのが実情である。1999年の夏にオクスフォードで体験したＳＤと今回のそれとでは感じが違うし、今回一緒に参加した同僚達の話でも、グループによってかなり様子が異なったようだ。

ＳＤをテーマに博士論文を準備中というデンマーク人の参加者が教えてくれたところによると、ネルゾン−ヘックマンの流れと、ニーチェ−ポストモダンとでもいうべき流れとがある。ニーチェ−ポストモダンの流れの内容を詳しく確かめることはできなかったが、例えば、「遡及的抽象 regressive abstruction」というＳＤにとって基本的な概念をまったく不可解なものとして退ける人々もあるようだ。ネルゾンとその後継者が理念の一つとした「理性の自己信頼 Selbstvertrauen der Vernunft」を、ニーチェ−ポストモダン派の人々はどう評価するのだろうか。

こうした違いが最も際立ったのは、ＳＤの本義が失われることを警戒し、そのアイデンティティを守ろうとするドイツのソクラテス者達と、ＳＤの本義にはこだわらず、その可能性を広げていこうとするドイツ以外のソクラテス者達の論争である。共同討議「ソクラティク・ダイアローグと倫理」のなかで、ドイツのグロンケ Horst Gronke は、ネルゾン−ヘックマンのＳＤが、批判的思考によって真理を目指す「批判哲学」の運動の一部であることを強調し、それを忘れてソクラテス者達が「市場」へ出て行くことによって、様々な「無責任なＳＤ」をすることに強い懸念を示した。そして、それを避けるために三つの提案をした。(1) ＳＤの明確な定義、(2) 資格のあるＳＤの進行役によって同意された倫理綱領、(3) 特許によるＳＤの保護。もとよりグロンケも、厳密な意味でのＳＤでなくても、「ＳＤ志向の対話 Socratic-oriented Dialogue」がなされることの意義は認め、「批判哲学としてのＳＤ」、「ＳＤ志向の対話」、「偽ソクラティク・ダイアローグ Para-Socratic Dialogue」を区別した上で、「ＳＤ志向の対話」が「偽ＳＤ」に陥らないための条件について厳しい検討を要求するのである。（ちなみに、グロンケに言わせれば、我々が試みているＳＤは無資格の進行役によるものでありＳＤではなく、せいぜい「ＳＤ志向の対話」ということになろう。）グロンケの主張は、一見倫理とは無関係に見えるビジネスや政治的な意志決定

の場面でもＳＤが倫理的な側面をもつと論じるオランダのケッセルス Jos Kessels や、あらゆるＳＤは、数学のＳＤ（数学の問題を考えるＳＤが実際に行われている。）ですら、倫理的であると論じるメキシコのレアル Fernando Leal に比べて、遥かに挑発的だった。

いうまでもなくグロンケの発表は議論を巻き起こし、オーストラリアのスタン・ヴァン−ホーフト Van Hooft が夕食後に特別に時間を設けて討議をすることを呼びかけ、20 人ほどが集まり、熱心な議論が行われたが、概ねグロンケの主張に批判的であった。「市場」で活躍するソクラテス者はすでにそれなりの経験と実績を積み上げてきており、「批判哲学」の矜持を説き、「特許」まで持ち出すグロンケの主張はいかにも狭量なものに思えたのだ。それはわかる。だが、私はグロンケの言うことに共感するだけでなく、もっと真剣に考えられるべきことだと思った。その理由は多分に感情的な面もある。ＳＤを守り伝えてきたネルゾンの後継者達の献身的努力に対するシンパシーである。だが、最大の理由は、私自身が、自分の経験した限りでのＳＤに対して感じていた疑問にグロンケの主張がよく答えてくれたことである。オクスフォードで経験した初めてのＳＤは面白かったし、哲学する方法としての可能性を感じさせるものだったが、その具体的な手続きについても、理論的な背景についても、よく理解できないところがあった。ネルゾンの理念を知り、グロンケのいうような「批判哲学」の実践という側面を考慮に入れて始めて、ＳＤの意義は私の腑に落ちたのである。グロンケはＳＤの可能性をいたずらに狭めようとしているのではなく、ＳＤを実践する者達が自分が何をしているのかを自覚することを求めているのである。

だが、様々な違いにもかかわらず、ソクラテス者達は一つところに集まって熱心に討論していた。学会の閉会式で、ソクラテス者達同士の対話を継続していこうという趣旨の飛び入りのアジェンダを、ヴァン−ホーフトが読み上げたのが印象的だった。

さて、今回の学会は前半３日間がＳＤ、後半３日間がシンポジウムやワークショップという構成だった。前述のように、私が前半に選んだのは「自由と正義は両立するか」のグループである。進行役は、ドイツのＳＤの指導的存在であるクローン Dieter Krohn。対話をあまりコントロールしないのが印象的だった。私が例の提供者になったが、なかなかの経験だった（私はそれまで例の提供者になったことはなかった。）そして、ＳＤにおける例とは一体何なのか考えさせられた。例を記述し、みんなの質問を受けると、自分の経験に様々な方向から光があてられ、提供者自身新しい発見がある。だが、私が自分の経験を反省することが目標なのではない。私の例に則して「自由と正義は両立するか」という問いに答えるべく対話することが目的なのである。その間私が経験したのは、例が私の手を離れるという感じである。私の例に基づいてなされる対話が、私の経験、私の実感から離れ、対話の中で例が一人歩きをしていると感じる。この点についてメーリングリストで尋ねてみると、例は一度提供されたらグループの共有財産になるのであり、提供者自身も例に対して客観的に関わるべきであるという意見と、例が提供者のものであり続けることがＳＤの原点であり、グループが常に提供者の経験に戻ることが肝要であるという意見と、二つに分かれた。今回の対話では、私は後者の立場で話し、例が自分の実感から離れることにあくまで抵抗した。し

かし、例をどう扱うかは、これからＳＤを実践して行くなかで、よく考えてみなければならないことの一つである。

後半は、先に述べたシンポジウムの他に、多彩なワークショップが用意されていた。タイトルだけ拾ってみても、いかに多くの角度から真剣な考察がＳＤに加えられているかがわかる。「ＳＤは学校における倫理の授業にどのように使えるか」、「子どもとの対話における倫理」、「ＳＤにおける実践的な例の分析」、「対話はどこまでオープンか」、「個人の教育にＳＤはどのように使うことができるか」、「進行役を養成するするのに不可欠なことは何か」、「倫理的な主題に関するＳＤの準備、実行、評価」、「政治的生活と将来の見通しに対するＳＤの重要性」、「ＳＤにおいて生じる理解を理解する：ＳＤの戦略的・分析的要素」、「ソクラテス的な態度と技能を培う」などである。こういった多彩な考察の背景には、地に足のついたＳＤの実践があることは言うまでもない。

最後に、英語でコミュニケーションすることについて。今回の学会はドイツで開催されたが、国際学会ということで共通言語は英語だった。私は、英語によるコミュニケーションには職業柄ある程度慣れてはいるが、それでも、例の提供者になることはやさしいことではない。それに比べると、ドイツ人達は、英語が苦手な人でも（語彙や文法の面では我々より劣る人でも）、我々日本人より表現力があることが多い。そして、会期中も日に日に上達していくのである。やはり同じヨーロッパの言語だから彼らにアドヴァンテージがあるのだ。我々はそれに伍してやっていかなければならない。シュンポジオンで、「君の同僚達はあまり発言しない。この学会から得るものがあるのか。」というような発言を何度も耳にして、私は複雑な気持ちだった。一緒に参加したみんなは、「もっと頑張ればいいのに」と言いたくなる場面もありはしたが、それぞれの関心からＳＤに迫ろうと努めていたのだ。にもかかわらず言語のハンディに対して余りにも鈍感なヨーロッパ人達の言動を目のあたりにして、憤りを感じた。唯一の例外はサランである。この点を問題にした私の発言に、あるオランダ人は「外国語でＳＤをすることを、私はその外国語を上達させる機会ととらえている」といかにも呑気な返答をした。「それなら日本語でＳＤをやってみれば」と皮肉の一つも言いたくなるが、しかし、英語が共通言語である以上「我々にはハンディがあるので、子どもに喋るようにゆっくりと言葉を選んで話してください」とはやはり言えないのである。近いうちに我々とドイツのソクラテス者達との交流が始まる可能性が高い。それに備えて、英語によるコミュニケーションの技能を磨いておきたい。

（てらだとしろう）